旋律学校全集：トルコ古典音楽楽譜集

松本奈穂子*

Ⅰ．序
Ⅱ．旋律学校の出版物
Ⅲ．『トルコ古典音楽楽譜集』における記譜上の特徴
Ⅳ．『トルコ古典音楽楽譜集』における選曲上の特徴
Ⅴ．結論

Ⅰ．序

1917年に設立された旋律学校 Dârü'l-elhân は，オスマン朝からトルコ共和国への移行期に活動した公立の音楽教育機関である。1927年その管轄が教育省からイスタンブル市に移ると，名前もイスタンブル音楽院 İstanbul Konservatuvarı と改称され，組織も改編が行われた。1944年にさらにイスタンブル市立音楽院 İstanbul Belediye Konservatuvarı として改組，現在はイスタンブル大学に付属して西洋音楽教育を続けている。とりわけ旋律学校時代からイスタンブル音楽院の両時期は音楽教育の傍ら，トルコ古典音楽やトルコ民俗音楽の五線譜による楽譜出版，音楽雑誌の発行，演奏活動，レコード録音，民謡収集など，往時の重要な音楽活動のほとんどを行っており，当時の音楽分野における中心的存在であったといえる。

これらの多様な活動のうち，五線譜による楽譜出版は第二章で述べるようにオスマン帝国では1826年から始まる西洋化の波の中で19世紀後半に始まったものであり，洋楽受容に関わるオスマン帝国の音楽文化の変化を見るうえで，きわめて重要である。

旋律学校はオスマン帝国で五線譜の楽譜出版を行った最初の公的機関であり，編集陣も委員長のラウフ・イェクター Rauf Yekta（1871-1935）をはじめとする往時第一線で活躍する音楽学者・作曲家たちであった。アメリカの音楽学者チャールズ・スィーガー Charles Seeger が提唱したように，楽譜は「規範譜 prescriptive notation」と「記述譜 descriptive notation」とに大きく分類できる（Seeger 1958：184-195）[1)]。日本の音楽学者徳丸吉彦は「伝承」に関わる論稿でスィーガーの理論とともにワルター・オング Walter Ong の「第二次口頭性」（Ong

提出日2015年9月24日　　受理日2015年11月25日
＊教養学部芸術学科音楽学課程准教授

1982：11）にも言及しており，「楽譜は口頭性に対立し，また，それを補足するもの」と述べている（徳丸 1993：74-75）。第二次口頭性はそもそも，「口頭性が記されないまま，空間的にも時間的にも離れた人間に働きかける」，例えば録音媒体などを指すとされるが，伝承において記譜の慣習がほとんど無かったトルコ古典音楽では「書記性 literacy」に含まれる記譜行為自体，通常の伝承行為を逸脱するものであり，「記す」という行為そのものよりも「間接的な伝達」という点を重視するならば広義における第二次口頭性とも言える現象であった[2)]。「録音」という言葉自体に「音を記録する」意味があることからも，両者とも「一度きり」ではなくある程度の「再現」を可能にするという点において，書記性と録音という第二次口頭性との類似性が認められよう。

作曲も記譜という行為を伴わなかったため楽譜は採譜者によって内容が異なってくるので，オスマン帝国において五線譜は記述譜としての位置づけがより強くなる。現在でもこの状況は基本的に変わらない。とはいえ，今日では音楽院も楽譜を用いることがすっかり定着しており，文化省所属の音楽団体も曲をあわせるときには団員に楽譜を配り，練習の際にも楽譜を用いている[3)]。この場合の五線譜は団員個々人が受け継いでいる伝承の差を縮めるための規範譜としても機能しているとも言える。すなわち，楽譜が記述譜となるか規範譜となるかは時と場合とによって異なってくるものであり，脈絡を無視して，ある特定の楽譜がどちらの範疇に属するかを分類することは意味をなさない。こうした楽譜の持つ二義性は，作曲家による自筆譜の存在が前提となる西洋古典音楽においても必ずついてまわるものであるが，口伝が基本であったオスマン帝国においては，その二義性がより顕著に現れると考えられる。その意味で，後述するように19世紀の本格的な五線譜導入後，「ピアノ伴奏パート」付きの楽譜の流行を経て，同時代最高の音楽学者や音楽家たちの編集作業により現在まで続くトルコ古典音楽楽譜集を出版した旋律学校の試みは，トルコ古典音楽史上重要な結節点の一つであると考えられる。

しかしながらこのような重要性をもつ旋律学校の出版物以前に同機関そのものに関する研究自体それほど進んではおらず，2000年以降トルコ共和国で徐々に活発になり始めた自国の音楽研究の流れの中で，とりわけ2010年前後からやっと進み始めたというのが現状である。オスマン朝末期から共和国初期にかけての音楽研究は1990年前後から本格的に始まり（Behar 1987, 1993, 2003［1998］，Feldman 1992, 1996, Kosal 1999, Oransay 1985, Özalp 2000a, 2000b, Paçacı 1999, Ünlü 2004），近年とりわけ2010年前後から活発になりはじめてきている（Altinay 2004, Araci 2006, 2010, Ayangil 2008, Baydar 2010, Behar 2008［2005］，Eğecioğlu 2012, Paçaci（ed.）2009, Paçaci 2010, Ünlü 2004, O'connell 2013）。2011年イスタンブル大学に付属する形でバルタリマヌのミルギュン・キョシュキュに設立されたオスマン音楽研究所はこうした近年盛んになりつつあるオスマン音楽研究の潮流を示すものでもあり，そこではトルコ古典音楽の声楽家でもありオスマン朝の音楽研究を続けているギョヌュル・パチャジュ Gönül Paçacı も教鞭を執っている。パチャジュは旋律学校に関する執筆・研究活動を数年来複数手がけており，継続する旋律学校研究への基盤を築いている（Paçacı 1994a, 1994b, 2007, 2010：202-215, 247-262, 390-392, 2011）。旋律学校も含めたオスマン朝の音楽教育史概要についてはジェム・ベハールも上述の複数の著作中に触れている他，エルギンのオスマン朝における教育史，オザルプのトルコ

音楽史，オズトゥナの音楽事典などでも扱われている（Ergin 1942：1254-1255, 1309-1320, Özalp 2000a, Öztuna 2006a, 2006b）。

こうした一連の研究の中で，旋律学校の出版物の一つである『トルコ古典音楽楽譜集』はその存在や総号数などは繰り返し言及されても具体的な分析対象とはこれまでされなかった。1995年にセマー・ヴァクフが旋律学校の編纂委員会によって準備されていたとされる後続の181号から263号までを出版し，冒頭につけた解説に続いて120号までの数号の巻末に繰り返し記載されている音律に関する特記事項[4]をラテン文字に転記した。また，パチャジュが2010年に同じく音律に関する特記事項と，新たに１号から120号までの収録曲情報（作曲家，曲種，マカーム，拍子）のラテン文字転記をしている（Paçaci 2010：249-250, 390-393）[5]。これらにより手つかずの状態であった同楽譜集に研究の光をあてはじめたことは高く評価されるが，この楽譜集にはさらに多くの情報が詰まっており，様々な観点からの研究が待たれる。

本論では，まず旋律学校以前の楽譜出版を概観した後，旋律学校の諸活動のうち五線譜による楽譜集出版とりわけ『トルコ古典音楽楽譜集』の頁構成と収録曲・作曲家に焦点をあて，その全体像を検討する。旋律学校および後継機関が出版した楽譜集はアナトリアの民謡集，メヴレヴィー教団典礼音楽集，イラーヒ集など複数あるが，旋律学校の名で出た楽譜集は，1924年から出版され始めた①『トルコ古典音楽楽譜集』の１号から120号[6]，②1926年に出版された『祖国の旋律集』，同じく1926年から出版され始めた③『アナトリア民謡集』第１冊から第７冊の３点である。どの楽譜集も重要な研究対象であるが，①は（１）旋律学校最初の楽譜出版物であり，かつ号数も多いこと，（２）オスマン朝において楽譜が導入される以前から理論が存在していたトルコ古典音楽というジャンルの楽譜集であるため，楽曲ごとの情報が豊富であること，などから現行の楽譜表記との比較なども含めて特性が多く抽出できると考え，本論における研究対象とした。なお，①の正式名称は120号までが『旋律学校全集 Dârü'l-elhân Külliyatı』，180号までが『トルコ音楽の古典曲集 Türk Musikisinin Klasikleri』，181号以降が再び『旋律学校全集』となっている。ただし，この『旋律学校全集』という名称は③の『アナトリア民謡集』にも用いられていることや，途中名称が変わっていることなどから，扱われている楽曲ジャンル名をとって本論では①の１号から263号までの全楽譜を『旋律学校全集：トルコ古典音楽楽譜集』で統一し，各タイトルの相違に言及するべき場合のみ，正式名称を用いることとする。分析にはイスタンブルのアタテュルク図書館と東海大学に所蔵されている１-180号，およびセマー・ヴァクフ出版の181-263号までを用いる[7]。

Ⅱ．旋律学校の出版物

Ⅱ-１．オスマン朝における五線譜出版

多くの非西洋諸国同様，口頭伝承が主体であったオスマン帝国の音楽文化で五線譜が積極的に用いられるようになったのは，1826年第30代スルタン，マフムート Mahmut２世（在位1808-1839）によって西洋式の音楽教育制度が導入されたときである。それ以前にも，西洋における巨大な隣国として常に相互に影響を与えあう関係にあったオスマン帝国には，西洋音楽

の様々な影響が入り込んできていた。しかし1826年は，イェニチェリの廃止に伴い従来の軍楽隊を西洋式の編成にするとともに，西洋音楽教育が宮廷内でも行われることになった。それまで内廷 Enderun にて行われていた伝統音楽の教育が，新編成された宮廷音楽隊 Muzika-i Hümayun にて西洋音楽の教育に変わっていったのである。オスマン朝の宮廷は，メヴレヴィー教団と並んで帝国内における最も重要な音楽家の養成所としても機能していた。その宮廷で西洋式の音楽教育が導入されたことの意義は極めて大きい。

この時期から，オスマン帝国では五線譜が普及していくことになる。ベハールはトルコ古典音楽において楽譜が積極的に用いられなかった背景について，トルコ古典音楽の伝承が「記憶の絶対性」に基づいた原理によって行われていたため，その秩序を揺るがす楽譜の出現について 1 章を割いて述べている（Behar 1987：19-63）[8]。オスマン朝では記譜の試みが全く無かったわけではないが[9]，楽譜がトルコ古典音楽の伝承に積極的に用いられることは，宮廷で西洋音楽の導入が正式に行われ始める1826年まで無かったのである。

オスマン朝において最初に五線譜の楽譜が出版され始めるのは1870年代である。1855年に帝室音楽隊に入り，トルコ音楽と西洋音楽とを学んだハジュ・エミン・エフェンディ Hacı Emin Efendi（1845-1907）が1873年にオスマニイェ印刷所と共同で石版印刷所を開いたのが始まりとされている。1887年に出版された五線譜を学ぶ者のための自著『楽譜の先生 Nota Muallimi[10]』の別名でも知られた彼はこの印刷所でアリフ・ベイ Arif Bey（1831-1885），シェヴキ・ベイ Şevki Bey（1860-1890），リファト・ベイ Rif'at Bey（1820-1888）ら往時の大作曲家たちの歌曲を中心として400ほどの楽譜を印刷したが，これらは “Chant Turc”（トルコの歌）という楽譜タイトルがラテン文字で表示されており，トルコ人作曲のトルコ古典音楽作品に，彼の師であるグアテッリ・パシャ Guatelli Paşa やザティ・ベイ Zati Bey らがピアノにより和声をつけたものであった（Behar 1987：95, Öztuna 2006a：261, Paçaci 2010：218-220）。235号の表紙には①ハジ・エミン自身作曲および②記譜による③ヒュッザーム Hüzzam 旋法 makam，④デュイェク Düyek の拍子 usul による⑤歌曲であり，⑥ザティ・ベイが和声づけをしていることが記載されている[11]。これらのうち②，⑤はフランス語表記，③，④，⑥はオスマン語表記（アラビア文字），①と⑤は両言語での表記である。③の旋法と④のトルコの拍子が表記されていることでこの曲がトルコ古典音楽であることがわかるが，そこに⑥和声づけが行われていることで，現在では行われていないトルコ古典音楽と西洋音楽との融合の試みが図られていることがうかがえる。また，②でエミン自身が楽譜を用いて作曲していることを敢えて明記していることも，そもそもオスマン朝では作曲という行為が楽譜に作品を記して発表するという西洋音楽の慣例となっている行為とは異なっていたことを示している。エミン以外の作曲家で五線譜上に自作を記す者も現れた。宮廷でムアッズィン長を務めた上述のリファト・ベイなどはその一人で，エミン同様帝室音楽隊で楽譜を学んでいる。この時代に宮廷で学び・仕えた者たちの中から，五線譜での作曲を積極的に行い始めた者が現れ始めたと考えられる。

1893年から発刊され始めたターヒル・ベイ Tahir Bey の雑誌『マールマート Malumat』の付録として付けられた『chant turcs（トルコの歌）』というタイトルの楽譜も，エミンが印刷したものである。≪大行進曲≫や≪スルタン万歳≫などのようにスルタンに献呈された曲なども

含まれているこの付録楽譜集の47号裏表紙には，後に旋律学校の教員にもなるアリ・リファト・ベイ[12] による「楽譜に関する注釈」が掲載されており，エミンの『楽譜の先生』とともに，トルコ古典音楽の五線譜記譜に関するその後の様々な試み－旋律学校の『旋律学校全集（トルコ古典音楽楽譜集)』内の音律に関する特記事項もその流れに含まれる－の一つとして注目される内容となっている（Ayangil 2008：416-418, Paçaci 2010：218-220)[13]。

ピアノ伴奏のない楽譜が急速に普及するのは20世紀初頭とりわけ第二次立憲政期以後で，シャームル・セリム Şamlı Selim，イスケンデル İskender とテヴフィク Tevfik，イスマイル・ハック・ベイ İsmail Hakkı Bey（1866-1927)，ウーディー・アフメット Udi Ahmet，オンニク・ザドルヤン Onnik Zadoryan，ファフリー・コプズ Fahri Kopuz（1882-1968）のような楽譜普及者たちが活躍する（Behar 1987：43)。元来和声概念の存在しないトルコ古典音楽にピアノで伴奏をつけ楽譜にするという行為は，当時オスマン朝でもてはやされていたピアノで演奏できる楽曲提供の需要とともに，西洋音楽の吸収と自国文化への応用の様々な試みの発露でもあった[14]。過度の西洋音楽偏重主義がひとしきり過ぎると，西洋音楽要素を何でもどこでも摂取するのではなく，必要なものを適宜自国の伝統音楽にも応用していくという姿勢が芽生え始める。こうした流れの中で旋律学校の楽譜は誕生してくるのである。

Ⅱ-2．旋律学校の出版物

旋律学校の開校以前にも音楽教育のための試みはいくつかあった。これらのうち最も重要な機関は当時のイスタンブル市長ジェミル・ベイ Cemil Bey（Topuzlu）の主導で開かれた「オスマン演劇学校（ダーリュルベダーイ）Dârülbedâyi-i」である[15]。同機関はパリから招聘された有名な演劇人アンドレ・アントワーヌ André Antoine の総監督下1914年に開設準備を始めた。演劇と音楽の学校として想定されていた同組織の演劇部門の部長にレシャド・ルドヴァン Reşad Rıdvan，音楽部門の部長に前述の作曲家アリ・リファト・ベイ（チャアタイ）Ali Rifat Bey（Çağatay）が就いた。音楽部門はさらに東洋と西洋の音楽科に分けられ，東洋音楽科は①オスマン朝の古典音楽（すなわち本論でいうトルコ古典音楽）を忘却・廃頽から守ること，②将来的には演劇に貢献するべく発展させること，③古典音楽作品をその本質を損なわない形で採譜し，④これらの作品に時代を生きるための活力を与え，音楽の喜びを人々に広めること，などを目的としていた。演劇が主軸であったこの機関における音楽教育は演劇に寄与するためという位置づけが強かったことが②から窺える。しかしながら，音楽学の見地からさらに重要であったのは①，③，④であった。①では西洋音楽の普及と，文化触変によるトルコ古典音楽への様々な影響のうち，望まれない忘却や廃頽を防ぐためにトルコ古典音楽教育が行われること，④では単なる保存ではなく時代に適った形の模索の姿勢が窺える。さらに③では安易な和声づけに走らない指針が見える。この３項目は旋律学校にも受け継がれていると考えられる。同学校の設立には演劇，舞台音楽，トルコ音楽，西洋音楽を分離させず総合的に研究するという思想が主張されていたが，第一次世界大戦の勃発によりアントワーヌは帰国，西洋音楽部門も閉鎖された。演劇とトルコ音楽部門の活動継続は試みられたが，経済的困窮から1916年３月14日にトルコ音楽部門も閉鎖された。いかに短期間しか活動しえなかったとしても，オスマン

演劇学校のトルコ音楽部門は設立目的や計画において，トルコ音楽史における重要な機関の一つであると言える。

オスマン演劇学校の音楽部門が果たした役割を引き継ぐような形で教育省の管轄下1917年に設立されたのが旋律学校である[16)]。戦時下設立１年で満足な活動ができない状態に陥ったが，1923年９月14日金曜日に諸規定が刷新されて再スタートを切る。学長には作曲家ムーサー・スュレイヤー・ベイ Mûsâ Süreyyâ Bey が任命された。旋律学校はこの時期にもっとも実り多い活動を行った。教育とともに，とりわけトルコ音楽に関する様々な出版や調査もこの時期に始まった。民俗音楽調査やトルコ古典音楽の確定 tesbit は，共和国におけるこうした研究活動の最初期を形成しており，後続の活動に与えた影響も重要である。楽曲の精査とともに出版活動も行った。「旋律学校雑誌 Dârülelhan Mecmuası」（計７号）を1924年から1926年まで続け，『トルコ古典音楽楽譜集』出版も行った。この楽譜は最初の120号をオスマン語，残りの60号をラテン文字で出版されたのは前述の通りである。西洋音楽部門やトルコ音楽部門の様々な学生・教員による演奏会も活発に行われた。このうち西洋音楽部門ではコンサート活動－多くはユニオン・フランセーズ Union Française で行った－や旋律学校雑誌において出版した論稿の他，研究志向の活動は見られない。

文部大臣 Maarif Vekilliği がムスタファ・ネジャティ Mustafa Necati の時，教育教養部局芸術委員会 Tâlim ve Terbiye Dairesi Sanâyi-i Nefise Encümeni による1926年12月９日の決定により，運営体制 yönetimliği と教育計画 öğretim programı が変更され，トルコ古典音楽界には激震が走った。この新たなプログラムではアラトゥルカ Alaturka 部門は完全廃止され，トルコ古典音楽教員は解雇されてしまう。トルコ古典音楽活動は，新たに組織された「トルコ音楽演奏団 Türk Mûsikisi İcra Heyeti」と「歴史的トルコ音楽編纂委員会 Tarihi Türk Mûsikisi Eserlerini Tasnif ve Tesbit Heyeti」という名の二つの活動に限定された。分類確立委員会は活動当初ラウフ・イェクター・ベイ Rauf Yektâ Bey（1871-1935）を代表に，ゼカーイザーデ・ハーフズ・アフメット Zekâizâde Hâfız Ahmet，ムアッリム・イスマイル・ハック・ベイ Mallim İsmail Hakkı Bey らから構成された。芸術委員会のこの決定に関しイスタンブル市当局へ送られた規定の第３条には「委員会の第一の任務は（トルコ古典音楽の：筆者）保存と確立である。この活動うち優先権は宗教作品に与えられる。」として委員会の活動分野が定義されている。確立 tesbit・収集 derleme において宗教作品を優先させるのは，閉鎖されたテッケで発展した宗教音楽の傑作の喪失を防ぐためであったと考えられるがトルコ古典音楽の研究が「決して授業や教育にはしないことを条件に授業の無い日に音楽院で活動できる」という委員会の活動分野の制限は，トルコ古典音楽の生命力を危うくするものであったとオズトゥナは解釈している（Öztuna）。事実，研究は行えても教育ができないのでは伝承が途絶えてしまう。トルコ古典音楽界にとっては不毛の時代であったが，それでも楽譜の整備・発行などの研究活動が続けられたことは後代にトルコ古典音楽ジャンルをつなげるためのパイプ役としてたいへん重要であった。研究活動の優先順位が宗教曲に与えられたことで，ラテン文字表記の楽譜集には『メヴレヴィー典礼曲集』，『イラーヒ集』など，『トルコ古典音楽楽譜集』には含まれなかった宗教曲の楽譜集も含まれていくことになる。旋律学校は1927年１月22日にイスタンブル

音楽院 İstanbul Mûsikisi Konservatuarı の名でイスタンブル市の所属」となった。その後イスタンブル市立音楽院 İstanbul Belediye Konservatuvarı の名で活動を続ける。

旋律学校の名で出た楽譜集は，前述のとおり①『旋律学校全集（トルコ古典音楽楽譜集)』1号から120号，②1926年に出版された『祖国の旋律集』，同じく1926年から出版され始めた③『アナトリア民謡集』第1冊から第7冊の3種である。①はイスタンブル音楽院改組後「イスタンブル音楽院出版 İstanbul Konservatuarı Neşriyatı」による『トルコ音楽の古典集』の見出しで，1928年文字改革後のラテン文字表記で121号から180号までが後続出版され，さらに1995年セマー・ヴァクフが後続未発刊分の181号から263号を出版している。②は単行本で民謡集，③は第8冊から第13冊までがやはりイスタンブル音楽院改組後ラテン文字表記で後続出版されている。トルコ民俗音楽の楽譜2種が1926年から出版され始めたのは，この年にトルコ古典音楽の教育が禁止されたことと関連しており，それまでも民俗音楽に関わる調査・研究は行われてはいたがトルコ古典音楽教育の禁止によって活動の比重が移ったためである（Paçacı 2010)。

『トルコ古典音楽楽譜集』には上述の他の旋律学校出版楽譜と異なり出版年が無い。そのため各号の明確な出版の特定はまだ研究の途上にあるが，イェクターが没する1935年までには180号まで出版されていたはずであるとパチャジュは推察する[17)]。選曲と記譜は，上記のイェクター，ゼカイザーデ，イスマイル・ハックらによって厳正に行われた。選曲はもちろん，それぞれの曲の最も正当な伝承に基づく（と考えられる）形を記すことが重要で，「オスマン朝最後の大作曲家」ゼキャーイ・デデの息子が委員会にいることはこの観点からたいへん有益であったという。口伝では誰に稽古をつけてもらったかがたいへん重要であり，その伝承経路はトルコ古典音楽の世界では比較的はっきりしていた。当然ながら父ゼキャーイ・デデの薫陶を受けたゼカイザーデの記憶は大いに参照されたのであろう。

Ⅲ．『トルコ古典音楽楽譜集』における記譜上の特徴

Ⅲ - 1．基本構成

本章では『トルコ古典音楽楽譜集』における出版物としての体裁，マカームやウスールなどの記譜上の特性を検討する。楽譜集の基本的な構成は以下のとおりである。

①頁構成

4頁構成が多い。その内訳は1頁目表紙，2頁目が第1曲，3頁目が第4曲，4頁目に歌詞あるいは特記事項 ihtar mahsus となっている。基本的には歌詞が曲の掲載頁下部に収まって4頁目が空白になる場合には音律に関わる特記事項で充当しているようである。ただし音律に関わる特記事項が掲載されるのはオスマン語表記の120号までである。長い楽曲が掲載される場合は合併号となり2倍の8ページとなる。180号以降は裏表1葉，計2ページのみのものもある。

②表紙の記載事項

表紙には（1）出版団体（1号から120号までは書かれていないが，曲集名から明らかである)，（2）楽譜集のタイトル，（3）当該号掲載曲の作曲家名，（4）当該号掲載の曲種，旋法，

拍子，（５）編集団体関連事項，（６）権利の所在，（７）価格，（８）版元，などの情報が載せられている（写真１）。

オスマン語出版の１号から120号までは，（１）は該当記載無し，（２）は『旋律学校全集 Dârü'l-elhân Külliyatı』（３）と（４）は各号ごとに記載，（５）は「旋律学校設置の研究委員会により精査され，認定された　Dârü'l-elhânda müteşekkil heyet-i ilmi tarafından tedkik ve kabul edilmiştir」である。トルコ語出版の120号から180号までは，（１）は「イスタンブル音楽院出版 İstanbul Konservatuvarı Neşriyatı」（２）は「トルコ音楽の古典曲集 Türk Musikisinin Klasikleri」，（３）と（４）は各号ごとに記載，（５）は「音楽院の研究委員会より精査され，認定された Konservatuvardaki ilmi hey'et tarafından tetkik ve kabul edilmiştir.」である。（４）の曲種は，ペシュレヴ peşrev，ムラッバ murabba，アウル・セマーイー ağır semai，ユリュク・セマーイー yürük semai，ナクシュ・アウル・セマーイー nakış ağır semai，ナクシュ・ユリュク・セマーイー nakış yürük semai，サズ・セマーイスィ saz semaisi，キャール kar，キャール・ナトゥク kar natık，シャルク şarkı の器楽曲，声楽曲とりまぜた10曲種が本楽譜集では収められている[18]。宗教曲は含まれていない。（６），（７）は文字が異なっても表記内容は同一で，（６）は「すべての権利は保護されている Her hakkı mahfuzdur」とあり，（７）はどちらも基本価格は５クルシュである。長い楽曲が掲載される場合は合併号となり，これは倍額の10クルシュとなっている。

（８）の印刷所情報は65号まで毎号，66号で一度消えたあと，67号で再度掲載され，68号以降出現しない。これは二箇所あり，１号から７号までが「アフメト・イフサンと仲間たち Ahmed İhsan ve　müşterekat」，８号から67号までが「オスマン出版 matbaai osmaniye」の表記となっている。

なお，拍子は割愛されている場合もある。アウル・セマーイーとユリュク・セマーイー，サズ・セマーイスィの拍子は省略されている。これは基本的に拍子がどの楽曲でも同一であるためである。なお，アウル・セマーイーの拍子にはアウル・アクサク・セマーイーとアクサク・セマーイーの二種があるが，その別も表紙には記載されない。サズ・セマーイスィも通常アクサク・セマーイーで始まり最終部でユリュク・セマーイーなど他の拍子に移る形が定型化しているため表紙や該当曲掲載頁冒頭の楽曲情報部分には記載されていない[19]。楽曲の終結を示す son の文字が127号から現れはじめるが，その後の全作品に記されているわけではない。

長い楽曲が掲載される場合は合併号となり２倍の８ページ，価格も倍の10クルシュである。

③歌詞

歌詞は，該当曲掲載頁の下部あるいは最終頁に掲載されている。詩人の名前は掲載されていない。

④ラテン文字表記の特徴

全体的なラテン文字の表記に関して見られるいくつかの特徴としては，a）所有を表すセクメが無い，b）固有名詞（作曲家の名前や曲名）のキャピタライズが統一されていない，用語の表記の不統一[20] などが挙げられる。

楽譜集に含まれる様々な情報を検討するために，１号から263号全号の掲載曲一覧を表１に

記した（別表）。複数の楽曲が収録されている場合は掲載順に記した。掲載曲の作曲家，曲種，マカーム，ウスールの他，五線譜上の情報である拍子記号，そして演奏上の目安となる速度表示を各曲ごとに記した。120号以降のトルコ語表記では，上述のようにキャピタライズが統一されていないが，楽譜上に記載のとおり転記する。

号数と作品の総数は異なる。長い曲ではページ数が増える関係で合併号として扱われる。3号目から複数曲掲載が始まるように，短い曲の場合は同一号に複数曲収録される。180号までの合計掲載曲数は262曲，うち120号までが178曲，263号まであわせると合計330曲である。このうち120号まで7曲，180号までで8曲，263号までで13曲，作曲家不詳の楽曲がある。222, 239, 251, 253, 254, 255, 257, 258, 259, 260, 261号の11号分は，編集委員会によって楽曲が確定されぬまま番号のみが残っている。

Ⅲ-2．マカーム・拍子に関する表記

五線譜上でマカームを示すには，トルコ古典音楽用に改変を加えた変化記号が必要である。本楽譜集で用いられている変化記号はイェクターが考案したものであり（Ayangil 2008：），現在用いられているアレル・エズギ方式とは記号の書き方が異なる。出版楽譜の最終頁に頻出する音律に関わる特記事項を見ると，それぞれの音程が数値で示されているが，「イルハー irha'」（現行のコマ koma）の数値が異なるのみで，他のキュチュク・ミュジェンネブ，ビュユク・ミュジェンネブ，バーキイェの数値はアレル・エズギ方式と同じである。これら音律に関わる特記事項は前述のように他の特記事項や歌詞が最終頁に無い場合，繰り返し同じ解説が記載されている。音律の周知を読者に図ったものであろうか。イェクターの本楽譜集に注いだ情熱が伝わってくる。ただし，理由は不明であるがこの音律特記事項はラテン文字表記の120号以降は一切出現しない。

次に，拍子についてである。現在トルコ古典音楽やトルコ民俗音楽では，拍子の総称にウスール usul という言葉を用いる。しかし旋律学校楽譜集では，アラビア語起源のイーカー ika という用語で拍子分類を示している。また，120号までの最終頁の多くに記されたウスールに関する特記事項では，長大なウスールもそれまでは 4 / 4 の拍子記号で表現されていたが，この楽譜集ではそれぞれのウスールに応じた拍子記号が付され，ウスールのサイクルごとに実線の小節線が引かれることが説明されている。

これも踏まえた大きな特徴は3つある。①リズム譜を旋律譜の下に付記していること，②破線を入れるなどの小節線の工夫，③ウスール名を冒頭に付記すること，である。このうち①と②はイェクターによって導入された工夫である（Ayangil 2008：424）。

そもそもトルコ古典音楽のリズム概念は同音楽中のリズムの重要な指標となる楽器である鍋型二面太鼓クデュム kudüm の打法で拍が示される形をとっている。この打法を示したリズム譜を，旋律譜の下に付記することで，トルコ古典音楽の重要な二つの柱である旋律とリズム双方が示されることになる。セマーイー関連など短いサイクルの拍子は冒頭1段のみの表示が多いが，長大な拍子の場合は全小節にわたって付記されている[21)]。

ところでトルコ古典音楽では，リズムの枠とその下位区分は打法で示されても基本となる音

表 1　旋律学校楽譜集掲載曲一覧

号数	作曲家	マカーム	ウスール	拍子記号	拍数	リズム譜	曲種	速度記号	
								音符	速度
1	Hacı Sadullah Ağa	Sedaraban	Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
2	İsak		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
3	meçhul	Maye	Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Nakış Ağır semaî	4	80
	Bekir Ağa		Yürük Semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	104
4	Hacı Sadullah Ağa	Sedaraban	A. Semai	10/8-6/8	10	1段	Ağır semaî	4	116
	İsak		Y. Semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	80
5	Sensans			4/4				4	76
6	Dede Efendi	Maye	Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
7	Cerrahpaşa		Remel	28/2	28	全	Murabba	2	44
8	Arif Mehmed Ağa	Evcârâ	Havi	64/2	64	全	Murabba	2	50
9	Arif Mehmed Ağa		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	不鮮明
10	Şuman			4/4				無	無
11	Arif Mehmed Ağa	Evcârâ	A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	112
	Arif Mehmed Ağa		Y. Semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	100
12	Tanburî Emin Ağa	Acemaşiran	Hafif	32/2	32	全	peşrev	2	56
13	Dede Efendi		Zincir	*2	120	全	Murabba	4	40
14	Hoca Zakai Dede		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	44
15	Dede Efendi		sengin semaî	6/2	6	1段	Ağır semaî	2	44
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	96
16	Tanburî Emin Ağa		A. semai*9	10/8	10	各1段	saz semaîsi	8	112
17	Dilhayat Kalfa	Evcârâ	Çifte düyek	8/2	16	全	peşrev	2	66
18	Dilhayat Kalfa		A. semai-Y. semaî	10/8-6/8	10-6	各1段	saz semaîsi	8	122-132
19	Hoca Zekai Efendi	Müstear	Muhammes	16/2	32	全	kâr	2	44
20	Abdülhalim Ağa		Çember	12/2	24	全	Murabba	4	60
21	Gevrekzade		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
22	Bekir Ağa		A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	120
	Dellâlzade		Y. Semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	108
23	Giray	Sedaraban	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	66
	Giray		A. semai-Y. semaî	10/8-6/8	10-6	各1段	saz semaîsi	8	138
24-25	Itrî	Neva	Nimsakil*4	24/4*4	24*4	全	kâr	4	92*4
	Itrî		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
26	Dede Efendi		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	96
27	Kadri Efendi		A. semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	116
	Dede Efendi		Y. Semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
28	İsak	Gülizar	Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
29	İsak		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
30	İsak		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	80
	İsak		Y. Semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
31	Dede Efendi	Şehnaz	Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
32	Seyyid Nuh Efendi		Ağır çenber	12/1	24	全	Murabba	2	40
33	Küçük Mehmed Ağa		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
34	Nazım Efendi		sengin semaî	6/4	6	1段	Ağır semaî	4	60
	Kara İsmail Ağa		Y. Semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	100
35	Tanburî Zeki Mehmed Ağa	Neva	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	46
	Kantemiroğlu		A. semai-Y. semaî	10/8-6/4	10-6	各1段	saz semaîsi	8-4	126
36	İsak	Gülizar	Hafif	14/2	28	全	peşrev	2	48
	İsak		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	132
37	Sernâyi Dede Salih Efendi	Şehnaz	Düyek	8/8	8	1段	peşrev	8	112
	Arapzade		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	144
38	Dede Efendi	Bayatî	Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	40
39	Nazım Efendi		Nimdevir	9/2	18		Murabba	2	40
40	Hacı Salih Ağa		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	69
	Musalli Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	92
41	İsak		Darb-i fetih	88/2	88	全	peşrev	2	44
	İsak		A.S-C *10	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	112
42	Giray	Mahur	Düyek	8/4	8	1段	peşrev	4	104
	Giray		A. semai-Y. semaî	10/8-6/4	10-6	各1段	saz semaîsi	8	152
43	Meragi		Hafif	32/4	32	全	kâr	4	108
44	Dede Efendi		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	44
45	Eyyubî Mehmed Bey		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	44
46	Eyyubî Mehmed Bey		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	80
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	96
47	Dede Efendi	Ferahfezâ	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	56
	Zekâizâde Tanburî Osman Bey		A. semai-Y. semaî	10/8-6/8	10-6		saz semaîsi	8	112
48-49	Dede Efendi		Muhammes	16/2	32	全	kâr	2	44
50	Dede Efendi		Frengifer	14/2	28	全	Murabba	2	40
51	Eyyubî Mehmed Bey		Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
52	Dede Efendi		sengin semaî	6/2	6	1段	Nakış Y. semaî	2	44
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	96
53	Tanburî Zeki Mehmed Ağa	Ferahnâk	Zincir	*2	120	全	peşrev	2	40
	Kemani Ali Ağa		A. semai-Y. semaî	10/8-6/4	10-6		saz semaîsi	8-4	132-104
54	Dellâlzade		Muhammes	16/2	32	全	kâr	2	44
55	Şakir Ağa		Hafif	32/2	32	全	kâr	2	60
56	Şakir Ağa		Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40

57	Dede Efendi		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
58	Dede Efendi		Ağîr A. Semâi-Y. semâi	10/4-6/4	10-6	各1段	Nakış Y. semaî	4	80
	Şakir Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	100
59	Sernayî Dede Salih Efendi	Neveser	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	48
	Kanunî Ömer Efendi		A. semai-Y. semaî	10/8-6/4	10-6	各1段	saz semaîsi	8-4	126-126
60	Dede Efendi		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
61	Kömürcüzade		Berefşan	16/2	32	全	Murabba	2	44
62	Kömürcüzade		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	80
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	96
63	Tanburî Zekizade Osman Bey	Nühüft	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	66
	Nayî Salim Bey		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	112
64	Seyyid Nuh Efendi		Darb-i feth	88/2	88	全	Murabba	2	80
65	Eyyubi Ebubekir Ağa		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
66	Itrî		A. semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	112
	Eyyubi Ebubekir Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	104
67	Esad Efendi		Y-C *11	6/8	6-10	1段	Y. saz semaîsi	8	112
68-69	Hacı Sadullah Ağa	Arazbar puselik	Hafif*7	*7	*7	全	kâr	2	48*7
70	Hacı Sadullah Ağa		Darbeyn(Nim Sakil+Berefşan)	24/4+16/2	56	全	Murabba	無	無
71	Hacı Sadullah Ağa		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	80
	Hacı Sadullah Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	100
72	Itrî	Bestenigar	Darb-i feth	88/2	88	全	Murabba	2	40
73	Dede Efendi		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
74	不詳		Çifte düyek	8/4	16	1段	Nakış	4	60
	Dede Efendi		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Nakış Ağır semaî	4	80
75	Meragi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	112
76	Dede Efendi		Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	86
77	Arapzade		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	112
78	Zaharya	Isfahan	Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
79	Itrî		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
80	Mircemil		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Nakış Ağır semaî	4	80
81	不詳		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	114
	Hızır Ağa		A-C *12	10/8	10	各1段	saz semaîsi	8	132
82	İsak		Darb-i feth	88/2	88	全	peşrev	2	44
83	Arif Mehmed Ağa	Tahir puselik	Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
84	İsak		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
85	Dede Efendi		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	82
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	92
86	Kemanî Rıza Efendi		Muhammes	16/2	32	全	peşrev	2	40
	Kemanî Nişan Ağa		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	126
87-88	Meragi	Segâh	Hafif	32/2	32	全	kâr	2	44
89	Zaharya		Ağîr Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
	Eyyubî Bekir Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	108
90	Enfî Hasan Ağa		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	40
	不詳		A. semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	120
91	Arif Mehmed Ağa		Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
92	Itrî		sengin semaî	6/2	6	1段	Ağır semaî	2	56
	Itrî		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	108
93	Hacı Sadullah Ağa	Bayatî araban	Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
94	Hacı Sadullah Ağa		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
95	Hacı Sadullah Ağa		sengin semaî	6/2	6	1段	Ağır semaî	2	48
	Hacı Sadullah Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	96
96	Nazim Efendi	Muhayyer	Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
	Hacı Sadullah Ağa		A. semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	126
97	Hafız Post		Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
98	Hacı Sadullah Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	96
	不詳		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
99	Nayî Salim Bey		Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	40
	Nayî Salim Bey		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	120
100	Nayî Osman Dede	Segâh	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	40
	Nayî Osman Dede		A. semai	10/8	10	無	saz semaîsi	無	無
101	Dede Efendi	Gülizar	Ağır Düyek	8/4	8	無	şarkı	4	80
	Dede Efendi		A.	9/8	9	無	şarkı	8	144
	Dede Efendi		A.	9/8	9	無	şarkı	8	132
102	Nikoğos Usta	Acemaşiran	A.	9/4	9	無	şarkı	4	66
	不詳		sofyan(A.? Cifte sofyan?)	9/8	9	無	şarkı	8	168
	Nikoğos Usta		Ağır A.	9/4	9	無	şarkı	4	96
103	Dede Efendi	Nühüft	Ağır Düyek	8/4	8	無	şarkı	4	86
	SerNayî Ali Dede		sofyan(A.? Cifte sofyan?)	9/8	9	無	şarkı	8	184
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	無	şarkı	4	96
104	Musahib Seyyid Ahmed Ağa	Nihâvend-i kebir	Devr-i kebir	14/2	28	全	peşrev	2	50
105	Meragi		Devr-i Revan	14/8	14	全	kâr	8	132
	Meragi		Devr-i Revan	14/8	14	全	Nakış	8	132
106	Hafız Seyda Efendi		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	4	40
	Hafız Seyda Efendi		A. semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	112
107	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	96
	Musahib Seyyid Ahmed Ağa		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	152
108	Tanburî Numan Ağa	Şevkefza	sakil	48/2	48	全	peşrev	2	40
	Nayî Şeyh Said Efendi		A. semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	138

109	Dede Efendi		Çember	12/1	24	全	Murabba	2	40
110	Hafız Efendi		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	46
111	Kömürcüzade		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	66
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	96
112	Rıfat Bey	Neveser	Ağır Düyek	8/4	8	1段	şarkı	4	72
	Latif Efendi		Ağır A.	9/4	9	無	şarkı	4	60
	Rıfat Bey		devri hindi	7/8	7	無	şarkı	8	96
	Latif Efendi		sofyan(A.? Cifte sofyan?)	9/8	9	無	şarkı	8	160
113	Dellâlzade	Segâh	Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	şarkı	4	40
	Hacı Arif Bey		A.	9/8	9	1段	şarkı	8	108
	Dellâlzade		sofyan(A.? Cifte sofyan?)	9/8	9	1段	şarkı	8	102
114	Suyolcuzade Salih Efendi	Şevkefza	Ağır A.	9/4	9	1段	şarkı	4	60
	Sultan Abdülaziz		Evfer	9/4	9	1段	şarkı	4	104
	Zeki Mehmed Ağa		Düyek-Y. semâi	8/4-6/4	8-6	各1段	şarkı	4-4	88
115	Dede Efendi	Sultaniyegah	Zincir*3	*3	88	全	Murabba	2	40
116	Dede Efendi		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	50
117	Dede Efendi		A. semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	112
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	96
118	Kemani Ali Ağa	Şed araban	şarkı Devr-i Revan	13/4	13	1段	şarkı	4	54
	Denizlilioğlu Ali		A.	9/8	9	1段	şarkı	4	102
	Dede Efendi		Düyek	4/4	8	1段	şarkı	4	54
119	Sermüezzin Şakir Ağa		Ağır A.	9/4	9	無	şarkı	4	56
	II. Mahmud		Ağır A.	9/4	9	無	şarkı	4	88
	sahibi meçhul		A.	9/8	9	無	şarkı	8	152
120	Dede Efendi	Maye	Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	şarkı	4	54
	Mustafa İzzet Efendi		Ağır A.	9/4	9	1段	şarkı	4	60
	Mustafa İzzet Efendi		Ağır A.	9/4	9	1段	şarkı	4	66
121	Dede Efendi	Suzinâk	Derbeyin(3 Firengi Feri + 1 Berefşan)	3(14/2)+16/4	118	全	Murabba	2	40
122	Tellal zade		Devri kebir	14/2	28	全	Murabba	2	40
123	Dede Efendi		A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	4	120
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	100
124	Ahmet Ağa		çenber	12/1	24	全	Murabba	2	40
125	Mehmet Ağa		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	40
126	Mehmet Ağa		A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	4	108
	Mehmet Ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	96
127	Tamburî emin		Devri kebir	14/2	28	全	peşrev	2	54
	Tamburî emin		A. Semai	10/8-6/4	10	1段	saz semaîsi	8	138
128	Sadîk ağa	Büzürk	Berefşan	16/4	32	全	Murabba	2	40
129	III. Selim		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	44
130	Sadîk ağa		A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	96
	Sadîk ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
131	Nayî Osman		Muhammes	16/2	32	全	peşrev	2	48
	Nayî Osman		A. Semai-Y. semaî	10/8-6/4	10	1段	saz semaîsi	8	132
132	Tellal zade	Revnak	Zincir*2	*2	120	全	Murabba	2	40
133	Haşim Bey		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
134	Haşim Bey		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	56
	Haşim Bey		Y. semâi	6/4	6	1段	Nakış Y. semaî	4	69
135	Tamburî Osman Bey		Hafif	32/2	32	全	peşrev	2	48
	Dede Salih efendi		A. Semai-Y. semaî	10/8-6/8	10	1段	saz semaîsi	8	138
136	Hacı Fayık bey	Zâvil	devri hindi	7/8	7	1段	kâr	8	132
137	III. Selim		çenber	12/1	24	全	Murabba	2	40
138	Hacı Fayık bey		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	44
139	Mehmed ağa		A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	1?8
	III. Selim		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	1?8
140	Zeki Mehmet Ağa		Hafif	32/2	32	全	peşrev	2	48
	Keçi Arif ağa		A. Semai	10/8-6/8	10	1段	saz semaîsi	8	138
141	Hacı Fayık bey	DÜGÂH	Hafif	32/2	32	全	kâr	2	44
142	Es'ad efendi		Ağîr ÇENBER	12/1	24	全	Murabba	2	40
143	Tab'i		Devri kebir	14/2	28	全	Murabba	2	40
144	Tab'i		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	8	116
	Es'ad efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
145	Nayî Yusuf Paşa		Devri kebir	14/2	28	全	peşrev	2	48
	Nayî Yusuf Paşa		A. Semai-Y. semaî	10/8-6/4	10	1段	saz semaîsi	8	120
146	Musahip Mehmet Ağa	ISFAHANEK	REMEL	28/2	28	全	Murabba	2	44
147	Musahip Mehmet Ağa		Darbeyin (3Devri kebir+ 1 Berefşan)	*8	116	全	Murabba	2	44
148	Hafîz Abdullah Ağa		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	80
	Mir Mustafa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	96
149	Kemani Ali Ağa		Düyek	8/4	8	1段	peşrev	2	48
	Kemani Ali Ağa		A. Semai*13	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	118-66
150	III. Selim	PESENDİDE	AĞIR ÇEMBER	12/1	24	全	Murabba	2	40
151	Küçük Mehmet Ağa		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
152	III. Selim		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	30
	Dede Efendi		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
153	III. Selim		Hafif	32/2	32	全	peşrev	2	54
	III. Selim		A. Semai-Y. semâi	10/8-6/4	10	1段	saz semaîsi	8	112-132
154-155	Damat İbrahim Paşa	HİCAZHÜMAYUN	HAFİF	32/2	32	全	KÂR	2	54
156	Gevrek Zade		AĞIR ÇEMBER	12/1	24	全	Murabba	2	40
157	Seyit Nuh		sengin semai	6/2	6	1段	nakış Ağır semai	2	44

	Hacı Sadullah ağa		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
158	Musahip Ahmet Ağa		Devri kebir	14/2	28	1段	Peşrev	2	40
	İSAK		A. Semai	10/8	10	1段	saz semaîsi	8	152
159	III. Selim	SUZDİLÂRA	Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
160	III. Selim		ZARBEYN (1Devri kebir+ 1 Berefşan)	14/2+16/2	60	全	Murabba	2	40
161	III. Selim		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır semaî	4	80
	III. Selim		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
162	III. Selim		Düyek	8/4	8	1段	Peşrev	4	112
	Ahmet Ağa		Devri kebir	14/2	28	1段	Peşrev	2	50
	III. Selim		A. Semai-Y. semaî	10/8-6/8	10	1段	saz semaîsi	8	168-184
163-164	Gulâm Şâdî	PENCÜGÂH	sengin semai*6	*6	6	1段	KÂR	2*6	44
165	Merâgî		sengin semai	6/2	6	1段	KÂR	2	44
166	Itrî		ÇENBER	12/2	24	全	Murabba	2	60
167	Itrî		Feri	16/2	16	全	Murabba	2	48
168	Merâgî		A. Semai	10/8	10	1段	Ağır semaî	8	118
169	Acemler		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	104
170	Dede Salih Efendi		Devri kebir	14/2	28	全	Peşrev	2	48
171	Kantimir Oğlu		A. Semai-curcuna-Y. semaî	10/8-10/16-6/8	10	各拍子冒頭段	saz semaîsi	8	126
172	Yorğaki	HİCAZHÜMAYUN	Ağîr A.	9/4	9	1段	ŞARKI	4	66
	Yorğaki		Ağîr A.	9/4	9	1段	ŞARKI	4	88
173	Dede Efendi	Neva	Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	NAKIŞ Ağır semaî	4	72
	Hatip Zade		Y. semâi	6/4	6	1段	NAKIŞ Y. SEMAİ	4	92
174-175	Hatip Zade	RAST	*5	*5	*5	全	KÂRI NATIK	*5	*5
176	Gulâm Şâdî	REHAVÎ	HAFİF	32/2	32	全	KÂR	2	58
177	不詳		REMEL	28/2	28	全	Murabba	2	44
178	Kaptan Zade		FRENGİ FERİ	14/2	28	全	Murabba	2	40
179	Tellal Zade		Muhammes	16/2	32	全	Murabba	2	48
180	Tab'i		sengin semai	6/4	6	1段	Ağır semaî	4	44
	Merâgî		Y. semâi	6/4	6	1段	Y. semaî	4	100
181	Itrî		Berefşan	16/2	32	2段	Murabba	2	44
182	Tanbûrî Corci		Muhammes	16/2	32	2段	Murabba	2	無
183	Hâfız Post		Ağîr A. Semâi	10/4	10	1段	Ağır Semâî	4	無
	Itrî		Y. semâi	6/4	6	無	Y. Semâî	4	無
184	Dede Efendi		Düyek	8/8	8	1小節	Şarkı	8	無
	Nûman Ağa		記載なし(Düyek?)	8/8	8	無	Şarkı	8	無
	İstavri Usta		記載なし(Ağîr A.?)	9/4	9	無	Şarkı	4	無
185	Merâgî	RAST	Hafif	32/2	32	2段	Kâr	4	無
186	Merâgî		Düyek	8/4	8	1段	Kâr	4	無
187	Merâgî		Düyek	8/4	8	1小節	Kâr	4	104
188	Merâgî		Hafif	32/2	32	2段	Nakış	2	無
189	Merâgî		Devri Revan	14/8	14	1段	Kâr	8	無
190	Merâgî		Düyek	8/4	8	無	Nakış	4	無
191	Dede Efendi		Düyek	8/4	8	1段	Kâr	4	88
192	Dede Efendi ve Mahmud Efendi		Hafif	32/2	32	3段	Kâr	2	54
193	Mechûl		記載無し(Y. semâi?)	6/4	6	無	Kâr-ı nâtık	4	無
194	Merâgî		Feri	16/2	16	1段	Nakış	2	60
195-197	不詳		無記載	8/4	8	無	Kâr-ı nâtık	4	無
198	Tanbûrî Nûman Ağa		Remel	28/2	28	3段	Murabba	2	44
199	Merâgî		Y. Semâî	6/4	6	無	Y. Semâî	4	無
200	Zaharya		Ağır Çember	12/1	24	無	Murabba	無	無
201	Tab'i		Hafif	32/2	32	無	Murabba	2	40
202	Acemler		Devri Revan	14/8	14	1段	Nakış	8	無
	Taşcı Recep		A. Semai	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	無
203	Seydâ Hafız		Y. Semâî	6/4	6	無	Nakış Y. Semâî	4	無
204	Dilhayat Kalfa		Hafif	32/2	32	3段	Murabba	2	無
205	Mechûl		Y. Semâî	6/4	6	無	Nakış Y. Semâî	4	100
206	Merâgî		A. Semai	10/8	10	無	Ağır Semâî	無	無
207	Hâfız Post		Y. Semâî	6/4	6	無	Y. semaî	4	96
208	Mechûl		A. Semai	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	無
209	Merâgî		Devr-i Hindî	7/8	7	1段	Nakış	8	98
210	İlya	Sâz-kâr	Remel	28/2	28	無	Murabba	無	無
211	Tab'i		Zincir	*2	120	8段	Murabba	2	40
212	İlya		無記載(A. Semai)	10/8	10	無	Ağır Semâî	4	100
213	İlya		Y. Semâî	6/4	6	無	Y. semaî	4	108
214	Yusuf Çelebi	Nikrîz	Zincir	*2	120	無	Murabba	2	40
215	Hâfız Rifad Çelebi		Hafif	32/2	32	無	Murabba	2	52
216	Osman Ağa		無記載(A. Semai)	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	88
217	Kassamzâde		無記載(Y. Semâî)	6/4	6	無	Nakış Y. Semâî	4	84
218	Merâgî		無記載(sengin semaî-Y. Semâî)	6/2-6/4	6	無	Nakış Ağır Semâî	2	54
219	Bolâhenk Nûri Bey	Nihâvend	Ağır Çember	12/1	24	3段	Murabba	2	40
220	Bolâhenk Nûri Bey		Hafif	32/2	32	3段	Murabba	2	40
221	Bolâhenk Nûri Bey		A. Semai	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	100
223	Dede Efendi	RAST	Ağır Çember	12/1	24	3段	Murabba	2	40
224	III. Selim		Hafif	32/2	32	無	Murabba	2	40
225	Dede Efendi		無記載(sengin semaî)	6/2	6	無	Ağır Semâî	2	54
226	Dede Efendi		無記載(Y. Semâî)	6/4	6	無	Y. semaî	4	96
227	Itrî	Nikrîz	Muhammes	16/2	32	2段	Murabba	2	無
228	Haham		Zincir	*2	120	無	Murabba	2	無

229	Kadri Ağa		無記載(Y. Semâî)	6/4	6	無	Y. semaî	4	無
230	Tanburi Mustafa		無記載(A.?)	9/8	9	1段	Şarkı	8	無
231	Hacı Faik Bey	Nihâvend	Zincir	*2	120	全	Murabba	2	40
232	Rifat Bey		Hafif	32/2	32	全	Murabba	2	48
233	Hacı Faik Bey		無記載(A. Semai)	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	100
234	Rifat Bey		Y. semaî	6/4	6	無	Y. semaî	4	72
235	Hacı Arif Bey		Çember	12/2	24	2段	Murabba	2	無
236	Tanbûrî Ali Efendi		Y. semaî	6/4	6	無	Y. semaî	4	無
237	Hacı Faik Bey		Hafif	32/2	32	無	Kâr	無	無
238	Acemler		Y. semaî	6/8	6	無	Y. semaî	8	無
240	Dilhayat Kalfa	Mâhûr	Devr-i Kebîr	14/2	28	無	Murabba	2	44
241	Buhurîzâde Itrî Efendi		A. Semai	10/8	10	無	Nakış Ağır Semâî	8	110
242	Eyyûbî Bekir Ağa		A. Semai	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	80
243	Eyyûbî Bekir Ağa		Darbeyin(2Remel+1Muhammes)	2(28/2)+16/2	88	無	Murabba	2	無
244	Eyyûbî Bekir Ağa		無記載(Y. semaî)	6/4	6	無	Y. semaî	4	96?
245	Musahib Ahmed Ağa		Muhammes	16/2	32	無	Murabba	2	無
246	不詳		無記載(A. Semai)	10/8	10	無	Ağır Semâî	8	無
247	Dellâlzâde		無記載(Y. semaî)	6/4	6	無	Y. semaî	4	無
248	Tosunzâde		Berefşan	無記載	32	無	Murabba	2	無
249	Eyyûbî Bekir Ağa		Y. semaî	6/4	6	無	Y. semaî	無	無
250	Ahmed Efendi		Ağır Çember	12/1	24	無	Murabba	2	40
252	III. Selim		Devr-i revân	13/4	13	無	Şarkı	4	無
256	Dede Efendi		無記載(A.?)	9/8	9	無	Şarkı	8	無
262	Şakir Ağa		Devr-i revân	13/4	13	無	Şarkı	4	無
263	II. Mahmûd		A.	9/8	9	無	Şarkı	無	無

＊0 A.=Aksak, Y.=Yürük
＊1 222, 239, 251, 253, 254, 255, 257, 258, 259, 260, 261号は楽曲無し
＊2 Zincir は Çifte Düyek 8/2+Fahte10/2+ Çenber12/2+ Devri Kebir14/2+ Berefşan16/2
＊3 88(16+20+24+28)
＊4 24/4-48/4-24/4-26/4-28/4-24-48-24-26-28-6-14-16-16-16-24
＊5 12/2-14/2-8/2-16/2-32/2-16/2-8/4-4/2-12/2-10/2-28/2-48/2-26/4-9/2-10/8-6/8
＊6 6/2(6/2-6/8-6/2-6/8-6/8)
＊7 32/2+26/4+8/4+6/2+32/2
＊8 14/2+14/2+14/2+16/2
＊9 10/8-6/8-10/16
＊10 10/8-10/16
＊11 6/8-10/16
＊12 10/8-10/16
＊13 10/8-10/16

価は相対的なものであるため，どの音符を拍の単位として選ぶかという問題が，五線譜に移すときに生じてしまう。現在は各ウスールの拍子記号の書き方はある程度定型化してきているが，旋律学校楽譜集では，現在では見られない表記方法も散見される。

たとえば大リズムと呼ばれる拍子の一つである24拍子のチェンベル Çenber（Çember）は，現在では一般に四分の二十四拍子として表記されるが，本楽譜集51，56号などチェンベルの作品計16曲中14曲では一分の十二拍子という現在では使われない拍子記号になっている。この十二拍子中の下位区分小節は破線で区切って示している。124号では 1 小節が 2 段にわたって続いており，破線で示された下位区分小節は12小節含まれていることがわかる。120拍子のゼンジル Zencir（zincir）は合計60拍子で表示されている。チェンベルとは異なり，チフテ・デュイェク Çifte Düyek，ファフテ Fafte，デヴリ・ケビール Devri Kebir，ベレフシャン Berefşan といった下位構成拍子ごとに小節線が区切られるとともにその名称が付され，各々の下位区分拍子ごとに破線で小節線が示されている。ゼンジル以外に，147号などに見られるように，ダルベイン Darbeyn という大型の拍子を複数組み合わせた拍子の楽曲も出現する。ゼンジルの曲のうち115号デデ・エフェンディのムラッバには最後のベレフシャンが無いため，

例外的に88拍子である（Özkan 2010［1985］：796）。

この他にも，現在は「アウル ağır（ゆったりとした）」という言葉が追加されている拍子名の中には，「アウル」という語句無しに表記されているものがあるが，二分音符が基本拍となっている場合には，現今で「アウル」とされる拍子に読み替えると整合性が出るものがある。157号第１曲の拍子名センギン・セマイ sengin semai もアウル・センギン・セマイと読み替えると，現行と同じ拍子記号になる。一方で150号，156号などのアウル・チェンベルは本楽譜集では全音符が基本拍になっているが，現行では２分音符が基本となっているなど，「アウル」という言葉がついていても読み替えが必要なものもある。また，32号や89号，156号１曲目は，リズム譜冒頭では「アウル・チェンベル」表記だが，表紙では「チェンベル」表記になっているなど，曲集内での整合性がついていない場合も多い。172号第１曲のアウル・アクサクのように，現行と同じ表記・拍子記号のものもある。これら拍子表記の多様性にも，現在の表記に至るまでの様々な試行がうかがえる。

③の拍子名記載も，トルコ古典音楽ならではの特徴と言える。トルコ古典音楽では２拍子といった短いものから120拍子を超える長大な拍子まで約60種[22]あり，それぞれに名称が付されている。拍数が同じであっても，打法によって拍子の名前とその感覚が異なるのも，大きな特徴である。この拍子名が，各曲リズム譜の冒頭に記されている[23]。

また速度表示が各曲の冒頭に記されている。これもイェクターが初めて西洋音楽の理論を応用したもので，これによって楽曲のおおよその速度を提示できるようになった。

101号が初出で，以降120号まで集中的に28曲出現するシャルク şarkı[24]には，冒頭に拍子名の記載があるが，リズム譜の無いものもある。102号２曲目を初出として計６曲のシャルクの拍子にはソフヤンという記述があるが，楽曲は８分の９拍子でソフヤンは４拍子であるため，チフテ・ソフヤンの誤りの可能性がある[25]。

Ⅳ．『トルコ古典音楽楽譜集』における選曲上の特徴

Ⅳ - １．掲載曲の表記における特性

前章では旋律学校楽譜の基本的な共通点を検討した。本章では選曲，作曲家の選択，マカームの選択，順番などから見られる特徴を検討する。掲載作曲家数は120号までで56名，180号までで70名，263号までで85名である。作曲家名の記載は後述のように統一されておらず，異なる表記の同定をする必要があった。

一つの号に異なる作曲家の作品が複数収録されている場合，表紙の作曲家名の記載には a）一名のみ掲載，b）全員を一行で並列表記，c）全員を順番に表記，の３通りが見られる。a）は第３号のように片方が作曲家不詳の為判明している方のみ掲載する場合に多く見られる。c）は第22号のように縦列表記で，b）よりも多い。

表紙の作曲家名・曲目名記述と実際の掲載曲詳細には①同一作曲家名の不統一，②複数作曲家の表記順の不統一，③一部誤りなどが見られる。

①の例として，第３号の表紙における作曲家名記述箇所にはエユッビ・エブベキル・アアの

名があり，曲目記述箇所にはマーイェ・ナクシュ・アウル・セマイ，マーイェ・ナクシュ・ユリュク・セマイの２曲が記されている。しかし楽譜中の表記では，１曲目の作曲家は不明，２曲目の作曲家名はベキル・アアと記されており，同一作曲家でも表記は統一されていない。

この同一作曲家名の表記不統一は随所に見られる。例えばデデ・エフェンディ Dede Efendi は120号までの表紙では118号以外ハマムザーデ・イスマイル・デデ Hamamızade İsmail Dede の表記だが，掲載曲ページの冒頭にある楽曲基礎データ（マカーム，曲種，ウスール，作曲家）ではデデ・エフェンディの表記が多く，ハマムザーデ・イスマイル・デデの表記は73号と74号のみである。ギリシャ系の高名な作曲家ザハルヤ Zaharya も78号ではザハルヤだが80号ではミルジェミールの表記になっている。33号のキュチュク・メフメド・アアは125号ではメフメット・アア Mehmet Ağa，146号ではムサーヒプ・メフメット・アア Musahip Mehmet Ağa の表記である。104号のムサーヒブ・タンブーリ・セイイド・アフメド・アア Musahib Tanburi Seyyid Ahmed Ağa は124号ではアフメット・アアの表記である。メフメット，アフメット，ムスタファは頻出する名前でもあり，こうした作曲家の異名同一作曲家の判別には Öztuna 2006a,b などを主に用いた。

②の例として，第27号の表紙はハマムザーデ・イスマイル・デデ Hamamızade İsmail Dede が上段，カドリー・エフェンディ Kadri Efendi が下段の縦列表記となっているが，曲は後者のカドリー・エフェンディが２ページ目，前者が３ページ目と逆である。しかし他の号では縦列表記の場合ハマムザーデ・イスマイル・デデが特別に上段になることは無く掲載順通りなので，この場合は単なる誤りの可能性もある。ただし，後述するようにスルタンの作品と他の作曲家の作品が並存する場合，スルタンの名が上段に出る場合がある。

③の例として，第74号の表紙では作曲家名はウトリーになっているが，１曲目は作曲家不詳，２曲目はデデ・エフェンディの曲であるので，本来ならば作曲家が判明しているデデ・エフェンディの名前が表紙に出るはずであるが，該当号に掲載曲の無いウトリーの名が記載されており，誤りが見られる。

Ⅳ - ２．特記事項

音律と拍子に関する特記事項についてはⅢ章で述べたとおりであるが，他にも特記事項で扱われた内容は存在し，そこから編纂委員会の考えや読者層が読み取れる箇所も見られる。作曲家の略歴はその一つである。161号末頁の特記事項に，「本集を講読されている教養ある人々の中から，作曲家の生涯についての情報も載せて欲しいという要望を受け，本号より作曲家の略歴が追加される」という但し書きとともに，同号でとりあげたイブラヒム・パシャの略歴が載せられ始めている。すでに129号から掲載のあったセリム３世の略歴は159号に掲載され，既出の彼の作品の他の貴重な作品も近々に出版予定であることの予告が含まれ，実際後続の160号から162号までは彼の作品が続く。ただし，毎回新たな作曲家がとりあげられるたびに略歴が掲載されたわけではない。しかし，それでも特記事項に読者の意見も反映させるということは，反響が編集陣の手元にも届いてきており，その声に応えようという指針があったことを窺わせる。同時代を代表する音楽学者や音楽家を含む編集陣たちにとって，この楽譜集でとりあげる

ような著名な作曲家の略歴はわざわざ取り上げるまでもない自明の理であったかもしれない。そのような中でこうした要望は，大作曲家たちの略歴を知らない人々すなわち国家の第一線で活躍しているわけではない音楽関連者たちにも，この楽譜集が読まれていた可能性を示唆する。

163-164合併号から，次号への言及も散見される。音楽関連出版物の広告なども見られる。168号の特記事項には，同号掲載作品作曲家のアブデュルカディル・メラーギーの生涯や作品が同楽譜集編纂委員会の長であるイェクターの『エサーティズ・エルハン Esatizi Elhan』第二巻に書かれていること，ベヤーズィトにあるシャムル・イスケンデルの店にて15クルシュで購入できることが記されている。177号の作曲家不明の作品に関しては，作風からウトリー楽派の可能性を指摘する特記事項が見られる。

180号以降は，既出の略歴を参照するための特記事項も散見される。204号４ページ目のディルハヤット・カルファ略歴には，彼女のエヴジャラ・マカームによるペシュレヴとサズ・セマーイスィが彼女の代表作であり，既に本楽譜集で出版していることが言及されている。出版号は17号と18号であるが，この注記には号数の部分が括弧で括られたまま空白で残されている。おそらく後で号数を確認して要れる予定であったのだろう。ここからはこの原稿が未完で仕事の手順が見えること，さらセマー・ヴァクフが未完部分に手を入れず出版することに重きを置いていたことがうかがえる。215号のハーフズ・リファド・チェレビー略歴では，彼のイェギャー・マカームのムラッバも本楽譜集に収録予定であることが記されている。しかしこれは実現されていない。

Ⅳ-３．西洋古典音楽作曲家の作品

同楽譜集にはトルコ古典音楽以外のヨーロッパの作曲家による楽曲も２曲掲載されている。５号にフランスの作曲家サン・サーンス（1835-1921）の《サムソンとデリラ（フリスティンの合唱）》，10号にドイツの作曲家ロベルト・シューマン Robert Schumann（1885-1952）の《子守唄》，である。この楽譜集が，旋律学校の教員や学生たちの演奏レパートリーと連動する形もとっていたということは，パチャジュによっても指摘されている（Paçaci 2010：）。従って，トルコ古典音楽レパートリーの確定のための楽譜でありながらもこの２点が収録されているのは，旋律学校の演奏会レパートリーを楽譜集に含めることも念頭にあり，それが当初は西洋音楽の演奏会レパートリーも視野にあったからであろう。そもそもこの２号は『旋律学校全集』の名で出ているシリーズに含まれているので，「トルコ古典音楽」と謳われていない以上混入していても矛盾は無く，場合によってはその後も旋律学校の演奏会レパートリーで取り上げられる他の西洋の作曲家の作品が掲載されていたかもしれない。しかしながら，その後の号にはトルコ古典作曲家以外の作品は掲載されていないため，初期の段階でトルコ古典音楽に選曲を絞ることの微調整が行われたものと考えられる。発刊当初にのみ含まれていたということは，当初は楽譜編纂の意図が旋律学校の演奏活動とも連動させることでの啓蒙にもあったが，後にトルコ音楽の遺産を次世代へとつなげることに傾いていったこと－まだこれは推察の域を出ないが，1926年のトルコ古典音楽教育禁止はその契機の一つとなったかもしれない－を窺わせる。

Ⅳ - 4．掲載作曲家

表 2 は作曲家別の掲載数である（別表）。掲載曲順ではなく生没年順に並べ替えてある[26]。

最も掲載曲数が多い作曲家はハマムザーデ・イスマイル・デデ（1777-1845）である。120号までに33号分38曲，180号までに 4 号 5 曲，263号までに 6 号分 6 曲，合計49曲で，全体の16％とたいへん高い出現率である。自身の考案したマカーム，スルターニ・イェギャーの楽曲も115号から117号に 4 曲掲載されている。また，彼の作品はほとんどオスマン語表記の初期に出版されていることがわかる。ハマムザーデ・イスマイル・デデはオスマン朝の作曲家の中で最も高名であり，編纂初期より彼の作品の掲載には議論を待つまでも無かったのかもしれない。

２番目に多い作曲家はアブデュルカディル・メラーギー Abdülkadir Meragi（1353-1435）である。120号までに 4 号分 5 曲，180号までに 7 号 8 曲，263号までに17号分18曲である。ただし，ベハールも言うようにトルコ古典音楽レパートリーで作曲されたおおよその時代を知れる最も古い作品は16世紀後半より前には遡らないとされる。作曲家としてのメラーギー伝説は16, 17，18世紀と継続して作り出され広められた伝説であり，伝統の「古さ」や「正当性」を誇張するきらいがある（Behar 1987：55）。従って彼の作品の評価には注意が必要である。

３番目に多い作曲家がセリム 3 世Ⅲ. Selim と，キュチュク・メフメト・アア Küçük Mehmet Ağa でそれぞれ15曲である。ハマムザーデとは対照的に，セリム 3 世はオスマン語表記の楽譜ではゼロ，120号から180号までが最も多く13曲となっている。セリム 3 世は作曲意外にマカームの考案にも関心を示し，スーズィディラーラ suzidilara，イスファハネク（ジェディード）isfahanek cedid，ヒジャーゼイン hicazeyn，シェヴキディル şevkidil，ネヴァープーセリク nevapuselik，アラズバルプーセリク arazbarpuselik, ネヴァーキュルディー nevakürdi, ゲルダーニイェキュルディー gerdaniyekürdi，ヒュセイニキュルディー hüseynikürdi，ペセンディデ pesendide などを考案している。このうちペセンディデ，スーズィディラーラ，アラズバルプーセリクのマカームは掲載されており，セリム 3 世自身の作も含まれている。スルタン関連ではガズィ・ギライが第23号に一番早く掲載され，次に114号のアブデュル・アズィズ[27]，３人目が119号のマフムート 2 世，セリム 3 世は 4 人目である。

第139号ではセリム 3 世の曲は 2 曲目だが，タイトルはセリムの名前が先に来ている。162号の特記事項には同号掲載のセリム 3 世によるスーズィディラーラ・マカームのペシュレヴとサズ・セマーイスィ，アフメット・アアのペシュレヴがアブデュルバキ・デデの文字譜を典拠として五線譜化されたものであり，他から出版されている低俗な譜とは異なることが強調されている。ゼカイザーデという正当な伝承の持ち主による記憶とともに，オスマン朝時代に記された文字譜も，この楽譜集を出版するにあたって編集委員会が参照していることがわかる。同楽譜集の編纂がオスマン朝時代に日常的な伝承の場以外で記され続けた楽譜類にも依拠していたことはフェルドマンも指摘している（Feldman 1996：450）。

４番目に多いのがハマムザーデ・イスマイル・デデと同等に重要なブフーリーザーデ・ムスタファ・ウトリー Buhurizade Mustafa Itri（1640-1711）の14曲となっている。

作曲家年代順に見ると，16世紀以前の作曲家が 3 名（メラーギー，グラーム・サーディー，ガーズイ・ギライ）見られる。

17世紀頃の作曲家は約28名，18世紀頃の作曲家は約48名，19世紀頃の作曲家は約45名，20世紀の作曲家は約５名である。この数には生没年が不明確であったり，ハマムザーデ・イスマイル・デデのように18世紀から19世紀にわたって活躍したことが考えられる者も多いため，重複があるが，ほぼ18世紀，19世紀の作曲家の作品が多いことがわかる。「古典」なので，同時代のトルコ古典音楽作曲家の作品は，イェクターのものすら出てこない。

曲の掲載順は，マカームごとに括られていることが目を引く。それもファスルを想定した選曲が続く箇所がある。ファスルとは，組曲のような形で演奏される曲の組み合わせである。同一のマカームで選曲されることが伝統である[28)]。曲集は同一のマカームが続くことが多いが，よく見るとファスルで演奏できる選曲を順番に行っていることがわかる。サン＝サーンスやシューマン同様，演奏会と連動した企画であったとも考えられる。マカームは合計39種掲載されており，最も多いのはラーストの29曲，２番目にマーフールの22曲，３番目にセギャーとレハーヴィの13曲と続く。

Ⅴ．結論

旋律学校の『トルコ古典音楽楽譜集』には，自国の伝統音楽を正当な伝承に基づいてある程度固定させるために五線譜という西洋音楽の記譜法を応用して，口伝に基づく同一作品における様々なヴァージョンの「記述譜」中における「規範譜」を作り，今後の発展に寄与させるという目的があったと考えることができる。とりわけ1926年から始まるトルコ古典音楽教育やラジオ放送の禁止といった時代，音響を発する機会が制限されようとも伝承の道を途絶えさせないためには「記譜」は重要な音楽文化伝統保存継承の手段であったであろう。イェクターら編纂委員会はオスマン朝時代に記された楽譜類も精査する一方で，口伝の形態も重視した。「オスマン朝最後の大作曲家」ゼキャーイ・デデの息子をはじめ，オスマン朝の音楽文化の中で育ったほぼ最後の世代に属し，かつ優秀な音楽家・研究者たちの編集による楽譜集は，あと少し時代を下れば（良い意味でも悪い意味でも）同等のクオリティでは作り得なかったかもしれない。この時代は門外不出の口伝の作品もまだまだ多い時代であり，口伝の作品を記す重要な場面の一つが本楽譜集にも記されている。198号の４ページ目にある「考察」には，同号掲載のタンブーリ・ヌマン・アア作ラースト・マカームによるムラッバがクレカプス（ガラタ地区）にあるメヴレヴィーハーネのシェイフで音楽にも造詣の深いアタウッラ・エフェンディ Ataulla Efendi[29)]（1842-1910）以外知る者はいなかったこと，アタウッラはデデ・エフェンディの弟子の一人ユスキュダルル・ホジャ・ヴァヒプ・エフェンディ（?-1896）から，誰にも稽古をつけないという条件でこのムラッバを習ったということ，アタウッラはヴァヒプ・エフェンディの生前は彼との約束を守りイェクターの度重なる願いにも応えず採譜させなかったがヴァヒプ・エフェンディの死後やっと承諾したために，たいへん貴重なこの作品も喪失から免れたこと，がイェクターによって記されている。イェクターはアタウッラーの弟子でもあったから，師のレパートリーには詳しかったであろう。すでに記されている作品以外の楽曲については伝承が途切れてしまえばそのまま消え去ってしまうところを，訓練された耳と音楽に対する深い

表２　『トルコ古典音楽楽譜集』作曲家一覧

	作曲家	生没年	総計	180まで	1–120	121–180	180–263	世紀別分布			
1	Hoca Abdülkadir Meragi	1353–1435	18	8	5	3	10	15			
2	GULÂM ŞÂDÎ	?–c1510	2	2	0	2	0	16			
3	Gazi Giray Han	1554–1608	4	4	4	0	0	16	17		
4	ACEMLER	17c	3	1	0	1	2		17		
5	Natî Damadî Ahmed Efendi	17世紀頃	1	0	0	0	1		17		
6	Kadri Efendi	?–1650?	2	1	1	0	1		17		
7	Hafız Post	1620?–1694	3	1	1	0	2		17		
8	Gevrekzade Mustafa Ağa	?–1680	2	2	1	1	0		17		
9	Hatip Zade Osman Efendi	1640?–1680?	2	2	0	2	0		17		
10	Taşçı Recep	?–1690?	1	0	0	0	1		17		
11	Musalli Efendi	?–1710?	1	1	1	0	0		17	18	
12	Buhurizade Mustafa Itrî Efendi	1638–1712	14	9	7	2	5		17	18	
13	Seyyid Nuh Efendi	?–1714	3	3	2	1	0		17	18	
14	Nazım Efendi	1650?–1727	3	3	3	0	0		17	18	
15	Kaptan Zade	?–1725?	1	1	0	1	0		17	18	
16	Nayî Osman Dede	1652?–1730?	4	4	2	2	0		17	18	
17	Enfî Hasan Ağa	1670?–1724	1	1	1	0	0		17	18	
18	Yusuf Çelebi	1670?–1728?	1		0	0	1		17	18	
19	Damat İbrahim Paşa	1670?–1730	1	1	0	1	0		17	18	
20	Kantemiroğlu	1673–1727	2	2	1	1	0		17	18	
21	Kara İsmail Ağa	1674?–1724	1	1	1	0	0		17	18	
22	Şeyhülislam Esad Efendi	1685–1753	3	3	1	2	0		17	18	
23	Eyyubi Ebubekir Ağa	1685?–1759a.	9	5	5	0	4		17	18	
24	Tosunzâde	1640?–1715	1		0	0	1		17	18	
25	Hâfız Rifad Çelebi	?–1720?	1		0	0	1		17	18	
26	Hacı Salih Ağa	?–1725_	1	1	1	0	0		17	18	
27	Cerrahpaşa müezzini Halil Efendi	?–1735?	1	1	1	0	0		17	18	
28	Tanbûrî Mustafa	?–1745?	1		0	0	1		17	18	
29	Zaharya	?–1740?	4	3	3	0	1		17	18	
30	Arapzade	1689–1746	2	2	2	0	0		17	18	
31	Hızır Ağa	?–1760?	1	1	1	0	0			18	
32	Şivelioğlu Yorgaki	?–1770?	2	2	0	2	0			18	
33	Tab'i Mustafa Efendi	1705?–1785?	6	3	0	3	3			18	
34	İlya	1718?–1799?	3		0	0	3			18	
35	Abdülhalim Ağa	1720?–1802	1	1	1	0	0			18	
36	Musahib Seyyid Ahmed Ağa	1728?–1794		5	2	3	1			18	
37	Hafız Şeyda Efendi	1732?–1800	3	2	2	0	1			18	
38	Küçük Mehmed Ağa	?–1800?	15	8	1	7	0			18	
39	Mir Mustafa(Münir Mustafa Ağa)	?–1805	1	1	0	1	0			18	19
40	Osman Ağa(Mehterbaşı, tanburi)	?–1805?	1		0	0	1			18	19
41	Tanburî İsak	1745–1814	13	13	12	1	0			18	19
42	Tanburî Emin Ağa	1750–?–1814	4	4	2	2	0			18	19
43	Tanburî Numan Ağa	1750?–1834	3	1	1	0	2			18	19
44	Sadïk Ağa	1757?–1815	3	3	0	3	0			18	19
45	Hacı Sadullah Ağa	1760?–18.9.1808	12	12	11	1	0			18	19
46	Dilhayat Kalfa	1760?–1820?(1710–1780)	4	2	2	0	2			18	19
47	III. Selim	1761–1808	15	13	0	13	2			18	19
48	Tanbûrî Corci	18世紀	1		0	0	1			18	19
49	SerNayî Ali Dede	?–1820?	1	1	1	0	0			18	19
50	Kemani Ali Ağa	1770–1830	2	2	2	0	0			18	19
51	Hafız Abdullah Ağa	1775?–1825?	1	1	0	1	0			18	19
52	Kömürcüzade Hafız Efendi	?–1835?	3	3	3	0	0			18	19
53	İstavri Usta	?–1840?	1		0	0	1			18	19
54	Tanburî Zeki Mehmed Ağa	1776–1846	4	4	3	1	0			18	19
55	Hamamızade İsmail Dede	1777–1845	49	43	38	5	6			18	19
56	Şakir Ağa	1779–1840	5	4	4	0	1			18	19
57	Kemanî Rıza Efendi	1780–1852	1	1	1	0	0			18	19
58	İkinci Sultan Mahmud	1785–1839	2	1	1	0	1			18	19
59	Keçi Arif Ağa	1790?–1843	1	1	0	1	0			18	19

60	Haham	?–1849	1		0	0	1			18	19
61	Dellâlzade İsmail Efendi	1797–1869	8	7	4	3	1				19
62	Denizlilioğlu Ali	?–1860?	2	2	1	1	0				19
63	Mustafa İzzet Efendi	1801–1876	2	2	2	0	0				19
64	Nayî Şeyh Said Efendi	1803?–1850	1	1	1	0	0				19
65	Eyyubî Mehmed Bey	1804–1850	3	3	3	0	0				19
66	Suyolcuzade Salih Efendi	1807–1862	1	1	1	0	0				19
67	Sernâyi Dede Salih Efendi	1810?–1888	4	4	2	2	0				19
68	Haşim Bey(Müezzinbaşı Hacı Hüseyin)	1815–1868	3	3	0	3	0				19
69	Kanunî Ömer Efendi	?–1870?	1	1	1	0	0				19
70	Latif Efendi(Latif Ağa, Suyolcu)	1815?–1885?	2	2	2	0	0				19
71	Zekâizâde Tanburî Osman Bey	1816–1885	3	3	2	1	0				19
72	Sermüezzin, Rıfat Bey	1820–1888	4	2	2	0	2				19
73	Kemanî Nişan Ağa	?–1888?	1	1	1	0	0				19
74	NAYÎ YUSUF PAŞA	1821–1884	1	1	0	1	0				19
75	Hoca Zakai Dede	1825–1897	2	2	2	0	0				19
76	Nayî Salim Bey	1829?–1885	3	3	3	0	0				19
77	Sultan Abdülaziz	1830–1876	1	1	1	0	0				19
78	Nikoğos Usta	1830?–1890?	2	2	2	0	0				19
79	Arif Mehmed Ağa'(Hacı Arif Bey)	1831–1885	8	7	7	0	1				19
80	Hacı Fayık bey	1831?–1891	6	3	0	3	3				19
81	Bolâhenk Nûri Bey	1834–1910	3		0	0	3				19
82	Sensans	1835–1921	1	1	1	0	0				19
83	Tanbûrî Ali Efendi	1836–1890	1		0	0	1				19
84	Shumann	1885–1952	1	1	1	0	0				19
	Dede Efendi ve Mahmud Efendi		1		0	0	1				
	作曲家不詳		12	7	6	1	5				

見識とで丹念に聞き取り，19世紀最後の四半世紀に流行った和声づけなどの脚色をすることなく，正当な伝承の形にできるだけ近いと考えられる形で記すことが丁寧に行われていたことが窺える。

旋律学校の楽譜は伝承経路によって異なるヴァリエーションの中から代表性のあるものを固定させるという意味で規範譜であるが，その作品のほとんどが口伝で作曲家自身によって記される慣習が無い以上，厳密な正当性を考えると記述譜の一つとなる。それでも，上述のように伝承の正当性に注意を払いながら楽譜を整備していった編集陣の姿勢は規範譜作成を志向するものであり，公的機関による「伝承への逸脱行為」の初の試みでもあったこの楽譜がそれ以後の楽譜出版にも大きな影響を与えたことを考えると，同機関の楽譜は重要な意味をもってくるのである。

本論は 2015 年度科学研究費『19 世紀末から 20 世紀初頭におけるイスタンブルの音響文化』（代表者　松本奈穂子）の成果の一部である。

注

1）スィーガーの理論を簡潔かつ明快に紹介している文献として「演奏を規定する規範的な」規範譜と「ある特定の演奏を記録した記述的な」記述譜（採譜 transcription も含む）の例にバロック音楽やイヌイットの音楽採譜例を引いた徳丸 1993 がある（徳丸 1993：75-79）。

2）であるからこそ，習得を速めるため記譜をした弟子に，無断で稽古を録音する弟子に対して同様「（技の）泥棒行為」と激怒するという現象が起こったのである。時間がかかろうとも身体以外の記録媒体を用いることなく自らの記憶と身体にその音楽特性を刻み込んでいく口伝は，個々の

表現記号が表し尽くせない演奏上の微妙なニュアンスや，楽譜上ではまったく指示のない部分における適切な表現，個々の演奏者の感性や体格にあった演奏法，時と場合に応じた臨機応変な演奏の仕方など楽譜では伝えることのできない多くの情報を提供していく。また，言葉や他の記号では伝わりきらない情報も，何度も稽古を重ねることで　ポラニーの言う「暗黙知」(Polanyi 1983［1966］)）が形成されていく。この様々な情報の伝授を重要視するため，オスマン帝国に限らず多くの文化では口伝が楽譜よりも重んじられるのである。技の伝承については生田 1987 も参照。

3）ユルドゥズ宮殿に近い建物を拠点としている文化省所属のトルコ古典音楽団における合同練習でもこの光景が見られた。さらにはその楽譜に記されている音高の解釈に関わる議論も見られた。作曲家の自筆に基づかない楽譜に記された音は彼らにとって「絶対」では無いのである。

4）1 , 2 , 4 , 6 -10, 13, 14, 16-18, 20-22, 24（25 と合併）-26, 28, 29, 31-34, 38, 39, 41, 42, 44, 45, 48（49 と合併），50-52, 54-57, 59-61, 65, 67, 68（69 と合併），72, 73, 76-79, 83, 84, 91, 93-95, 97, 106, 107, 109, 110, 115-117 の計 64 号の各最終頁に掲載されている。

5）ただし，パチャジュがラテン文字転記した収録曲情報は楽譜内の各曲冒頭に記載された情報であり，表紙の記載とは異なるため本論で述べる表紙と内容の記載に稀に見られる矛盾は反映されていない。また，各曲冒頭に記される拍子には，セマイ関連曲種の拍子はある程度限定されるので記されていないため，これも反映されていない。なお，Paçaci 2010 の各号掲載曲のラテン文字転記にはいくつか誤りもある。103 号所収の 3 曲のマカーム名がニハーヴェントとなっているが，正しくはニュフフトである。また 71 号 2 曲目，81 号 2 曲目の記載が抜けている（Paçaci 2010：391- 2 ）。

6）121 号から 180 号まではイスタンブル音楽院の名でラテン文字出版されている。

7）分析対象には上述の音律に関する特記事項に記されている変化記号なども含むが，煩雑さを避けるためそれ以上の音律論には本論では踏み込まない。歌詞についても本論では扱わない。

8）新井によって 1994 年に日本語訳が出版されている。本論における同書からの引用に関わる訳語は旋律学校以外基本的にこの新井の訳語に準ずる。

9）ポーランド出身のアリ・ウフキー Ali Ufki（1610-1675 頃）は 17 世紀半ば，五線譜上に右から左へと通常とは逆の方向に記譜を行なった（Ufkî 1975)。ルーマニア出身のカンテミルオール Kantemiroğlu（1673-1727）は 18 世紀前半に自ら考案した文字譜で約 350 曲の当時の器楽曲を採譜した（Kantemiroğlu, 2001)。アルメニア正教徒のハンパルスム・リモンジュヤン Hamparsum Limoncuyan（1768-1839）は 18 世紀後半にアルメニア文字譜を用いて採譜した。記譜の習慣が稀薄であったオスマン帝国で彼らが記譜を行ったのは，楽譜の存在が当然の文化圏に彼らが属していたことも一つの要因であろうが，同時にムスリムの作曲家たちの中にも記譜を試みる者は存在した。16 世紀の軍楽や 17 世紀のメヴレヴィー教団典礼歌の一部など，帝国を訪れたヨーロッパ人による楽曲の断片記録も散見される（Aksoy 1994)。

10）Ayangil 2008：416-418 や Paçaci 2010：116-120 にその概要や一部ラテン文字転写などがある。

11）同楽譜の表紙は Paçaci 2010 にも掲載され，オスマン語のラテン文字転写も行われている（Paçaci 2010：218, 220)。

12）旋律学校以前にも東方音楽協会の教師，オスマン演劇学校の音楽部門長などを歴任しており，オスマン朝からトルコ共和国にかけての音楽教育や洋楽受容の流れにおいて重要な人物の一人である。

13）パチャジュはこのマールマート誌付録楽譜リストを，1978 年の第一回トルコ学会議で音楽研究者エテム・ルーイ・ユンギョルが発表したトルコ音楽楽譜出版に関する報告をもとに 49 冊分作成している（Paçaci 2010：379-382)。

14）こうした西洋文化と自国文化との出会いによって生じた様々な現象は，現在でも高く評価されるものも，奇異なものも含め，多くの非西洋諸国で見られた。日本における邦楽と西洋音楽との

出会いによる文化触変については渡辺 2002 などに詳しい。
15）演劇分野を主体としたオスマン演劇学校の詳細は永田 2006 を参照。
16）旋律学校の設立過程や規定集 talimatname，定期刊行雑誌や他の楽譜集などからうかがえる活動内容などの詳細は別稿にて論じる。
17）2014 年 9 月の面談より。
18）177 号のみ，曲種が該当曲掲載頁冒頭には記載されているものの表紙には記載されていない。
19）本楽譜集所収のサズ・セマーイスィはほとんどが最終部でユリュク・セマーイーに移行するものであるが，149 号掲載曲は最終部で 10 拍子のジュルジュナに移行，158 号掲載曲は最後までアクサク・セマイのみ，171 号では第 3 部で 10 拍子のジュルジュナ，第 4 部でユリュク・セマイに移行するなどの異なる構成も見られる。ただし，これらはいずれもサズ・セマイスィに特有の拍子構成である。
20）例えば tanbur と tambur など。
21）158 号 1 曲目と 162 号 2 曲目のデヴリ・ケビール（28 拍子）は，例外的に 1 段のみの表記になっている。
22）同一のリズム型でも五線譜上に表す上で 1 拍の単位となる音価が異なるため名称が異なっているものは別の拍子として数えた場合。
23）162 号 2 曲目はリズム譜からデヴリ・ケビール（28 拍子）と判別できるが，例外的に拍子名表記が楽譜冒頭に無い。170 号掲載曲も，リズム譜や表紙および掲載曲欄拍子からデヴリ・ケビール（28 拍子）と判別できるが，拍子名表記が楽譜冒頭に無い。
24）歌曲の一種。120 号以降も出現しているが，この箇所の集中出現度が高い。
25）チフテ･ソフヤンは19世紀末から20世紀初頭まで多く使われた名称であり，現在は速いアクサックの意でユリュック・アクサックを用いるとオズトゥナは述べている（Öztuna 2006b：510）が，オズカンのようにチフテ・ソフヤンの用語を用いる研究者もいる（Özkan 2010［1985］：639-640）。
26）作曲家と作品を同定していく過程で，当該作曲家の作とは断定しきれないもの，されていないものもいくつかあった。イルヤはその一人であり，彼に限らず作品混同や人名混同などの問題はトルコ古典音楽では完全には解決できない問題の一つである（Öztuna 2006a：388）。
27）ただし彼の名は表紙には掲載されていない。表紙に掲載曲作曲家の表記が網羅されていない号もある。
28）現在ではこの，同一マカームという制限が逆に単調さの要因の一つとも考えられるため，古典音楽の演奏会では様々なマカームで様々な形式の曲が選ばれることが多い。
29）ガラタ修道所の最後から 2 番目のシェイフ。作曲はしなかったがトルコ音楽を良く理解する人物の一人であった（Öztuna 2006a：127））。

参考文献

日本語文献

生田久美子　1987.『「わざ」から知る』東京：東京大学出版会。
徳丸吉彦　1993［1991］『民族音楽学』東京：放送大学教育振興会。
永田雄三　2006.「オスマン帝国末期イスタンブルの演劇空間」,『駿台史学』Vol.129, pp.105-128.
渡辺裕　2002.『日本文化　モダン・ラプソディ』東京：春秋社 .

外国語文献

Aksoy, Bülent. 1994. *Avrupalı Gezginlerin Gözüyle Osmanlılarda Musıki.* İstanbul：Pan Yayıncılık.
Altinay, F. Reyhan. 2004 *Cumhuriyet Döneminde Türk Halk Müziği*. İzmir：Ege Üniversitesi Devlet Türk Müziği Konservatuvarı.

Araci, Emre. 2006. *Donizetti Paşa*. İstanbul：Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık.
— 2010. *Naum Tiyatrosu:19. Yüzyıl İstanbul'nun İtalyan Operası*. İstanbul：Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık.
Arel, Hüseyin Sadettin. 1969 *Türk Musikisi Kimindir*, İstanbul：Miili Eğitim Basımevi.
Ayangil, Ruhi. 2008 "Western Notation in Turkish Music". *Jounal of the Royal Asiatic Societies*, 3,18, 4,. Pp.401-447.
Baydar, Evren Kutlay. 2010 *Osmanlı'nın Avrupalı Müzisyenleri*. İstanbul：Kapı Yayınları.
Behar, Cem. 1987 *Klasik Türk Musıkisi Üzerine Denemeler*, Ankara：Bağlam Yayıncılık.（新井政美（訳）1994 年『トルコ音楽にみる伝統と近代』神奈川：東海大学出版会）
— 1993. *Zaman, Mekan, Müzik: Klasik Türk Msıkisinde Eğitim（Meşk）, İcra ve Aktarım*. İstanbul：AFA Yayıncılık.
— 2003［1998］. *Aşık Olmayınca Meşk Olmaz: Geleneksel Osmanlı/Türk Müziğinde Öğretim ve İntikal*. İstanbul：Yakı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık Ticaret A.Ş.
— 2008［2005］. *Musıkiden Müziğe: Osmanlı /Türk Müziği: Gelenek ve Modernlik*. İstanbul：Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık Ticaret A.Ş.
Eğecioğlu, Ömer. 2012. *Müzisyen Strausslar ve Osmanlı Hanedanı*. İstanbul：Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık.
Ergin Nihat. 1999. *Yıldız Sarayında Müzik: Abdülhamid II Dönemi*. Ankara：T.C. Kültür Bakanlığı.
Ergin, Osman（ed.）1942-43. *Türkiye Maarif Tarihi: İstanbul Mektebleri ve İlim, Terbiye ve San'at Müesseseleri*. 4 vols. İstanbul：Osmanbey Matbaası.
Feldman, Walter. 1992. "Cultural Authority and Authenticity in the Turkish Repertoire". *Asian Music*, 22（3）：73-113.
Feldman, Walter. 1996. *Music of the Ottoman Court: Makam, Composition and the Early Ottoman Instrumental Repertoire*. Berlin：Verlag für Wissenshaft und Bildung, Intercultural Music Studies, No.10.
İbnülemin, 19?? Hoş Sada, İstanbul：
İhsanoğlu, Ekmeleddin（ed.）2003 *Osmanlı Musikî Literatürü Tarihi*, İstanbul：İslâm Tarih, Sanat ve Kültür Araştırma Merkezi.
Kantemiroğlu. 2001, *Musikiyi Harflerle Tesbit ve İcra İlminin Kitabı I,II*, İstanbul：Yapı Kredi Yayınları.
Kosal, Vedat. 1999. *Western Classical Music in the Ottoman Empire*. İstanbul：EKO Basım Yayıncılık ve Organizasyon Ltd. Şti.
Ong, Walter. 1982. *Orality and Literacy: the Technologizing of the World*. London；New York：Methuen.
Oransay, Gültekin（ed.）1985. *Atatürk ile Küğ*. İzmir：Küğ Yayınları.
Oransay, Gültekin. "Müzik：Cumhuriyetin İlk Elli Yılında Geleneksel Sanat Musikimiz". *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*,10：1496-1509.
Özalp, Dr. M. Nazmi. 2000a *Türk Musikisi Tarihi I*. İstanbul：Milli Eğitim Basımevi.
— 2000b *Türk Musikisi Tarihi II*. İstanbul：Milli Eğitim Basımevi.
Özkan, İsmail Hakkı. 2010［1984］*Türk Musıkisi Nazariyatı ve Usulleri*. İstanbul：Ötüken Neşriyatı.
Öztuna, Yılmaz. 2006a *Türk Mûsikîsi: Akademik Türk San'at Mûsikîsi'nin Ansiklopedik Sözlüğü I*, Ankara：Orient Yayınları.
— 2006b *Türk Mûsikîsi: Akademik Türk San'at Mûsikîsi'nin Ansiklopedik Sözlüğü II*, Ankara：Orient Yayınları.
Paçaci, Gönül（ed.）1999 *Cumhuriyet'in Sesleri*, İstanbul：Tarih Vakfı Yayınları.
Paçaci, Gönül. 1994a. "Kuruluşunun 77. yılında Dar-ül-elhan ve Türk Musikisinin Gelişimi I." *Tarih ve*

Toplum, no.121, pp.
— 1994b. “Kuruluşunun 77. yılında Dar-ül-elhan ve Türk Musikisinin Gelişimi II.” *Tarih ve Toplum*, no.122, pp.
— 1999 “Cumhuriyet’in Sesli Serüveni.”, *Cumhuriyet’in Sesleri*, İstanbul：Tarih Vakfı Yayınları, pp. 10-29.
— 2007. “Müzikte yasak olur mu?” *Mete Tunçay’a Armağan*. İstanbul：İletişim Yayınları. pp.651-675.
— 2010. *Osmanlı Müziğini Okumak*, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.
— 2011. “Darülelhan’ın 1924-25 Yıllarında Verdiği Konserler ve Konser Haberleri”. *Konservatoryum*, Cilt 1 , Sayı 2 , pp.67-88.
Polanyi, Michael. 1983［1966］. *The Tacit Dimension*, Gloucester, Mass：Peter Smith.
Seeger, Charles. 1958. “Prescriptive and descriptive music writing”. *Music Quarterly*. 44（2）：184-195.
Ufkî, Ali. 1975. *Mecmûa-i Sâz ü Söz*, İstanbul：Milli Eğitim Basımevi.
Ünlü, Cemal. 2004. *Git zaman gel zaman: fonograf – gramofon – taş plak*. İstanbul：Pan Yayıncılık.

楽譜資料

Dârü'l-elhân, *Dârü'l-elhân Külliyatı*, 1 -120.
İstanbul Konservatuvarı, *Türk Musikisinin Klasikleri*, 121-180.
SEMA VAKFI 1995 *Darülelhan Külliyatı 181-263*, İstanbul：Pan Yayıncılık.

Abstract

Dârü'l-elhân Külliyatı

Nahoko MATSUMOTO

Dârü'l-elhân（school of melody）, established in 1917, was an official insitute of music education. It had played quite important role as a center of music sector from the last period of the Ottoman Empire to the beginning of the Republic of Turkey. Its activities were not only educating, but also researching and collecting Turkish classical/ folk musics, publishing of musical magazine and Turkish clasiccal/folk music notes, holding Turkish/European music concerts, recording, and so on.

Dârü'l-elhân Külliyatı is one of serial publications from *Dârü'l-elhân*, in which 120 Turkish classical music works were collected. From no.120-180 were published by İstanbul Konservatuvarı under the title of Türk Musikisinin Klasikleri. The western musical notations had become one of important tools for music education and analyzing since 19th century in Ottoman Empire. However, in the world of Turkish classical music, in which the oral tradition is a basic method of transmission, western staff notation has always stronger duality：prescriptive and descriptive. In the last quarter of 19th century, the "harmonized" Turkish classical music scores came into fashion. After this trends, Turkish classical music scores, which were without harmony, were begun to publish in the beginning of 20th century. *Dârü'l-elhân Külliyatı* was published in this surroundings. Because of editing of excellent music scholar, Rauf Yekta, and composers, Muallim İsmail Hakkı Bey and Zekâizâde Hâfız Ahmet, this compilations should be one of important works in the Turkish classical music. In this paper, basical data of each pieces, such as *makam, usul*, composers, musical genres will be analized.